

未来の子どもたちへの想い

いのちの年齢は37億歳

今日は講題を「未来の子どもたちへの想い」とさせて頂きました。

福島原発事故のことをテーマにした「朝日のおたる家」という映画があります。「自然が美しいある町に突然降りかかる原発事故による悲劇と、否応なく事故に巻き込まれていくひとつの家族の姿を描いていく」とこの映画のホームページに紹介がありますが、原発賛成、反対ということではなくて、将来のあり方を一緒に考えていきましょうというのが映画の主旨のようです。

どういう沖繩になっていたらいいか、共に夢を描きながら考えていきたいのです。

お釈迦さまの時代、あるいは大乘仏教の歴史の中で、「社会」という表現はありません。「一切衆生」がすべてのキーワードだったんです。お釈迦さまは「一切衆生は安穩なれ、一切衆生は幸せであれ」と言ったと、古い経典には記されています。大事なのは一人一人への想いということです。例えば、ここに小さな子どもがいて、福島で被災した。この子どもたちがどうなるんだろう、なんでこんなことになったんだろうと、地球社会の上で生きている人間として、一人一人への想いを出発点に

でした。

総合研究所は昨年秋に、この上映会を京都駅の近くの会場で行いました。映画を見ているみんなが涙を流しています。原発事故で放射線をあびると、特に子どもたちの甲状腺がんの発生率が高くなるんです。不安になるし、将来にわたって不安の中で生きていかなければならない。さらに、事故の影響を受けた子どもたちが各地に疎開し、福島を離れて暮らしていますが、疎開先の学校や地域でもいじめにあう。学校の先生たちまで、そういうことに無意識なんです。そういうのが、現状な

悲しみ、苦しみが伝わってくる。でも私にはこの仕事があるので構ってられない。これが現実なんだと思いますけれども、共に生きているんだという想いだけは忘れたくありません。

地球が誕生したのが45億年前、そして生命が誕生したのが37億年前です。どんなイメージでしょうか。この地球上に、いのちが一点ぼつんと生まれる。何かぴかっと光るようにいのちが誕生する。そこからすべてが展開してくるんです。一人一人のいのちが誕生するんです。外に生えている木や草も、元をたどれば37億年前のいのちにつながっていく。ぼくら、全部そういう意味では同じいのちから展開して生きているんですよ。同じいのちを生きている！

本願寺
日曜レクチャー

生きていて、だれかが悲しんでいる、苦しんでいる。その

のです。

今の問題を考える時、10年、20年先を予測して、現在、何をすべきかを考える必要があります。子どもたちが、そしてこれから生まれてくる子どもたちが、どういう社会で暮らすことになるんだろうかということですね。そういう子どもたちがどういう社会で暮らすようになるのかを想像することが大事だと思います。

沖繩が抱える問題もそうです。沖繩に米軍がいることに賛成、反対という、政治的な、また軍事的な問題で考えるのではなくて、たとえば10年、20年先、

です。出発点から見れば皆さん同じ年齢ですよ。これを考えると、僕らが37億歳生きて、それで終わりですか。たぶん、終わりではないでしょう。人間関係から苦しみが生まれる

誕生というのはこの世界に、この身体を持って生まれること。往生というのは極楽浄土に生まれるということ。誕生と往生の間の数十年間、この身体を持って生きている。その前後はわか



りませんが、いのちの流れはこれからも続いていく。それを担^{にな}っていくのがこれからの子どもたちであり、これから生まれてくる子どもたちなんですね。そういう意味で、未来社会の子どもたちのいのちの問題を考えてほしいと思います。

もう一つ大切なことは、即如^{そくじよ}前門さまが将来に負の遺産を残してはいけないとお話しされていることです。プラスの遺産が残せなくても、例えば、原発とか環境問題で、将来に付けを回すようなことはしてはいけない、と。

21世紀の新しい大きな節目が来たよ
うな気がします。イギリスがEUから
離脱します。一番の根っこは、アジア
やアフリカから人が入ってくるのが嫌
だという人たちの思いがあって、それ
が離脱につながった。トランプさんだ
って同じじゃないですか。とにかく、
自分たちを守るんだ。イギリスも自分

たちを守るんだと。根本には排他的な
自分さえよければ、という思いが見え
隠れています。

最近の世界的な政治を見ると、良心
というか、これまでは自分本位ではい
けないんだという思いがどこかにあっ
て、バランスが取れていた。でも今は、
そういうものがすべて吹っ飛んでしま
った。自分本位への開き直りというこ
とでしょう。本当に、世界的にそうい
う傾向にあると思います。そうすると
協調とか信頼ということがなくなっ
ていく。そういう雰囲気の中で育って
く子どもたちは将来、どういうことを
考えるようになるのでしょうか。

こういう状況は、仏教が願っている
ことと正反対のことです。自己中心的
な思いを克服していく、そういう差別
的なあり方を克服していくというのが
仏教的なあり方です。

専如^{せんじよ}ご門主は自己中心性というお言

一番恐いのは無視されること。毎日そ
こらを歩いていても誰も挨拶してくれ
ない。無視される。自分が存在してい
ることが全然意味がない、かえってい
ない方がいいんじゃないかと錯覚させ
てしまう。

人間関係の劣化は、もっと切実な言
葉で言えば、人への想いやまなざしの
劣化ということ。関係って、思い合う
ことです。それがどんどん薄くなっ
ていく。国際間の政治でも、国とか家、
社会でもおなじです。日本という国は
こういう性格をしているというのは、
私たち一人一人の性格をトータルする
と日本の性格になるんであって、私た
ちと日本の性格は無関係ではないです

が反映されているんです。一人一人が
自己本位的になれば、国も自己本位的
なあり方をしていく。ですから、ある
意味、この人間関係の希薄化というの
は、政治とか経済の問題の根本になる
だろうと思います。

「四苦八苦」ってご存知ですよ。四
苦とは生老病死^{しょうろうびんじ}。残りの四苦とは、求^ぐ
不得苦^{ふとくく}—欲しいものが手に入らない
苦しみ。怨憎会苦^{おんぞうえく}—憎たらしい人と会
わなければならぬ苦しみ。愛別離苦^{あいべつりく}
—愛しい人たちと別離していかなけれ
ばならない苦しみ。五蘊盛苦^{ごいんじょうく}—生きる
ことそのものが苦しみ。私はこれを考
えるたびに、本当に驚きます。250
0年前の人たちも、既に人間関係が苦
をもたらすことを知っていたのだと。

“絶対あなたを見放さない”

宮沢賢治はこんなことを言っています。
「世界がぜんたい幸福にならない





しゃっています。

がこうになりたい、私がこうでありたい
というだけじゃない。十方衆生、生き
とし生けるもの、いのちあるものがこ
うでありますようにという誓いを立て
るんです。

専如ご門主は伝灯奉告法要の初日に
「念仏者の生き方」というご親教を示
され、その中で「(私たちは) 少しで
も仏さまのお心になう生き方を目指
し、精一杯努力させていただく人間に
なるのです」とおっしゃっています。
お心になう…、なにをすればお心に
かなうのでしょうか。

浄土真宗には戒律がありません。ど
うしてだと思えますか。あしなさい、
こうしなさいって言われた方は、基本
的には言われた通りにやれば、それで
いいんです。この社会でも、法律で決
めた範囲であれば、そう問題にはなら
ない。だから、幼稚園、小学校、中学
校、高校、大学まで規則ってあるじゃ
ないですか。ほかの宗教、宗派、みん
なあしなさい、これはだめ…と指示
してくれているんです。だからある意
味楽なんです。でも、浄土真宗はただ
ただ救ってくださいっているだけ。それ
で何してもいいと勘違いする人も出て
きますが、その人たちに親鸞聖人はお
手紙を書いて、それはダメだよとおっ

阿弥陀さまは、究極の現世利益であ
る摂取不捨(摂め取って捨てない)と
はたらき、よびかけてくださる。そう
いう絶対の安心の中で、安心して葛藤
しなさいということでしょう。摂取不
捨という力をいただかないで葛藤する
のは苦しいのではないでしょう。自
死に追い込まれたりする。世界中の人
が私を見捨てたとしても、絶対あなた
を見放さないというのが摂取不捨。だ
から、どんなことがあっても、安穩で
あり、追い詰められることはない。そ

の思いは、国の内外、
生きていく人に伝え
たいと思います。

宗門では「自他共
に心豊かに生きる」
といわれます。この

「自」は、今生きている私たち。「他」は
これから生まれてくるであろう子ども
たちもひっくるめてということをも意
味します。日本と他国、宗教もそう。
都合の悪い相手であっても、一緒にや
っていこうと試みる。誰だって自分が
犠牲になるのは嫌ですけど、でも、
だからといって、他者を犠牲にしては
いけない。お互い様じゃないですか。
一番大事なのは、生きていく道は「自
他共に」ということ。そこにこそ、心
の豊かさがあるのでしょうか。

(平成29年2月5日「本願寺日曜レ
クチャー」より)